

## 親子関係形成に向けての面会に関する NICU 看護師の思い

Thoughts of NICU Nurse about Parents' Visits and its Effects on Child-parent Bonding

安藤 晴美<sup>1)</sup>, 岡部 恵子<sup>2)</sup>

ANDO Harumi OKABE Keiko

## 要 旨

本研究に先立ち、NICU看護師の日常の中で親子関係形成に向けての思いについて分析した結果、その思いの表出場面としては、面会に関することが大多数を占めていることがわかった<sup>1)</sup>。今回は、この面会に関する思いに焦点を当て、その思いの意味について考察した。研究協力者は、一病院のNICU看護師(スタッフナース)11名であり、NICUに入院している低出生体重児とその親の一事例について、「この事例における子どもと親をどのように観て、どのように感じ、どのように考えているかを自由に話してください」という質問のみを提示した非構成的面接法でデータを収集した。その結果、看護師は個別的な看護実践をしていくために「親について知りたい」と、自身の看護実践していくことに対する「迷いや不安」という思いが、その主要なものであることがわかった。これらの思いの意味を実践者である看護師が意識化することにより、看護実践の向上につながると考える。

This study examined the attitudes of NICU nurses towards the formation of parent-child relationships during visiting hours. The subjects were 11 NICU staff nurses from one hospital. Data was collected through unstructured interviews using three questions: 1) How did you feel about the parents/baby visiting time, 2) How did you watch it, and 3) What did you think about it through the observation? The results suggested that nurses wanted to know about the parents in order to carry out their duties. In addition, it was revealed that nurses experience hesitation and uneasiness in their practice. It is important that nurses be aware of their individual nursing practice, which will in turn lead to improvement of their nursing care.

キーワード NICU, 看護師, 思い, 親子関係, 面会

Key Words Neonatal Intensive Care Unit, Nurse, Thought, Parent-Child Relationship, Visiting

## はじめに

我が国では現在、出生率は低下しているが、新生児医療は目覚ましい発展をし、低出生体重児の生存率は高くなってきており、低出生体重児の出生率は増加してきている<sup>2)3)4)</sup>。しかし、こうした低出生体重児の生存率の高まる一方で、確実な予後診断が困難なため、予測できない障害が残るといふ問題と、新生児の入院による親子分離は愛着形成を阻害し、子どもの受容を困難にする<sup>5)</sup>という問題が生じている。また、ハイリスク新生児の出生は、精神的・経済的なことのみならず、親・兄弟それぞれ

れの生活および家族全体の生活に影響を及ぼし、時に家族生活を根底から覆す事態を引き起こしており、虐待に至る可能性もある<sup>6)</sup>。これは、新生児医療においては生命の確保と共に、生命が確保された後での親子関係形成に向けての看護の役割の重要性が問われていることになる。

親子関係は、親と子がかかわることで形成するといわれ<sup>5)</sup>、また、新生児の出生直後のかかわりは、親子関係の出発点であると同時に、その親から子へのかかわりは人間を信頼するという人間としての生き方の基礎になる。しかし、低出生体重児は親子分離状態で関係形成をしていかなばならない状況におかれる。そのため、親子分離状況の中では親子の関係を築いていくことが看護上重要な課題となる。

このように低出生体重児における親子関係形成においても、出生直後の早期接触の重要性がいわれているが、低出生体重児の親が我が子を愛せるようになるためには、

受理日：2006年2月3日

1) 山梨大学大学院医学工学総合研究部(小児看護学):

Interdisciplinary Graduate School of Medicine and

Engineering(Pediatric Nursing), University of Yamanashi

2) つくば国際短期大学: Tsukuba international junior college

早期接触しつつ親が敗北感、怒りや悲しみといった感情のもつれをもち、それらを解きながら我が子と接するといったプロセスを通して親子関係が形成される<sup>7)</sup>。即ち、様々な不安要因をもつ子どもと接する親にとって、早期接触は必ずしも幸せな感情をもつとは限らないということであり、低出生体重児の出生直後からの親子関係に関する研究の中で、親子分離のリスクを抱えながらも親子関係が確かに発達していることを明らかにしている<sup>8)</sup>。そして、そのような結果をもたらすための低出生体重児の親への看護師の心理的援助の基本は、付き添い見守り手として存在することであるといわれており<sup>9)</sup>、看護師の見守り手としての役割を担う援助は、看護師の思考と感情が慎重に混ざり合わされてものとして表され<sup>10)</sup>、援助を必要としている親とのかかわりあいの中で看護師の目に見える看護行為として示される。しかし、こうした看護師の思考や感情の意味についてはあまり検討されてきていない。

本研究に先立ち、低出生体重児の援助を行うNICU看護師が日常の中で、親と子をどのように観て、どのように思い、親子関係形成に向けてどのように行動しようとしているのかについて明らかにするために分析した結果、その思いの表出場面としては面会に関することが大多数を占めていることがわかった<sup>1)</sup>。そこで、今回は親子の面会に関する思いに焦点を当てて分析し、看護師の親子関係形成への思い意味について考察することを本研究の目的とした。

## ・用語の定義

本研究において「思い」とは、意識的あるいは無意識的に「感じる思い」「期待、予期する思い」「予想、推量する思い」「考える思い」である。

## ・研究の方法

### 1. 研究方法と研究デザイン

非構成的面接法による質的記述的研究を用いた。

### 2. 研究協力者

一病院のNICUで勤務している看護師(スタッフナース)で、研究協力の同意を得られた11名を研究協力者とした。

### 3. データ収集方法

データ収集方法は、NICUに入院している一事例(Aちゃん)の低出生体重児とその親について、「この事例における子どもと親をどのように観て、どのように感じ、どのように考えているかを自由に話してください」とい

う質問をし、自由に語ってもらい、その語りの中から、親子の面会に関する語りを抽出するという方法である。

事例は、超低出生体重児とし、先天的な奇形や異常が認められていないこと、生後の経過では未熟児網膜症、虚血性脳障害や頭蓋内出血などの予後に影響を及ぼす可能性のある疾患が認められていないことを条件とし、家族背景や経済的な問題などが、主なる看護問題として挙げられていないことも考慮し選定した。

### 4. データ収集期間とデータ収集時間

平成14年12月9日～12月19日の間に11名の面接を行い、一人当たりの面接時間は約30～60分であった。

### 5. データの分析・考察方法

看護師個人々人との面接における語りを逐語録に起こし、親子関係形成に関して語っていると思われる言葉を抽出し、前後を読み、言葉を再構成して記述しコード化した。その中から、面会の場に関する看護師の言葉を抽出した。この面会の場での語り、何を意味しているかを吟味し、内容分析した上で分類・類型化し、カテゴリー名を付した。これらの過程を何度も繰り返し、分類および解釈の一貫性の確認と、必要時は修正・加筆し信頼性の確保に努め、解釈の適切性に関しては指導教員のスーパーバイズを受けた。そして、各カテゴリー間の関連についてKJ法の手法を用いて検討し、看護師の言葉にみる思いの意味について考察した。

### 6. 倫理的配慮

研究協力者に対して、研究の趣旨、匿名性の保持、研究の協力は自由意思であることに関して書面を用いて説明し、同意書のサインをもって同意が得られたことの確認をした。

## ・結果

### 1. 研究協力者の属性

研究協力者は、全員が女性であった。臨床経験年数は、最短2年、最長20年であり、1～5年4名、5～10年4名、10～15年2名、15～20年1名であり、平均8.0年であった。NICU経験年数は、最短2年、最長4年であり、平均2.2年であった。

### 2. NICU看護師の親子関係形成に向けての面会に関する思いの内容

NICU看護師の面接内容の逐語録より、親子関係形成に向けての思いに関するデータを抽出した結果、206個のコードが抽出された<sup>1)</sup>。その中から面会に関するデータを抽出した結果、172個のコードが抽出され、2個の大

カテゴリーに分類することができた。コード数については表1にまとめた。

各カテゴリーの看護師の思いは以下のである。なお、大カテゴリーは【 】、中カテゴリーは《 》として表し、小カテゴリーは表1に示した。また、小カテゴリーの代表例は「 」とし、表2、表3にまとめた。

#### 1) 【看護師の親を観察しての思い】(表2)

大カテゴリーの【看護師の親を観察しての思い】は、看護師が、面会の場での親の状態や以前と比しての変化を観て、親を理解してかかわろうとしている思いであり、8個の中カテゴリーに分類することができた。これらの中カテゴリーに含まれる看護師の思いは、以下のである。

1《親との関係づくりの必要性》は、なかなか親と会えていない状況から面会の機会を意図的に捉え、関係性を築いていきたいという思いを語っていると判断したものであり、5個の小カテゴリーがあった。

2《親を理解するための情報収集》は、親を理解するための情報収集の必要性や情報が不足していたことについて、今後の看護師の努力目標を語っていると判断したものであり、6個の小カテゴリーがあった。

3《親の気持ちの推測》は、看護師自身が面会状況を観て親の気持ちを汲み取ったり、次の面会を親に確認することの迷いなどについて語っていると判断したものであり、11個の小カテゴリーがあった。

4《親の気持ちの理解》は、看護記録や交換日記等の記録情報から感じ取ったり、看護師自身の過去の体験を通して親の気持ちや立場を理解しようとしていると判断したものであり、7個の小カテゴリーがあった。

5《親子関係のアセスメント》は、看護師が親子接触の場面を観察し、親と子の関係性はどのようになっているのかという関心、今の状況を観て、親子関係形成の今後の発展を期待していることや看護師自身がかかわるときの難しさなどを語っていると判断したものであり、5個の小カテゴリーがあった。

6《親と医師との仲介役割の評価》は、親へ医師から病状説明を行う前後で、親の気持ちに変化が生じたのか否かを気にして評価していると判断したものであり、2個の小カテゴリーがあった。

7《親の面会の様子の評価》は、親が面会に来ることを評価し、面会頻度について気掛かりを語っていると判断したものであり、4個の小カテゴリーがあった。

8《親の面会への心遣い》は、親の面会状況を観察し、家族背景や親の身体状況から推測して意味付けていると判断したものであり、2個の小カテゴリーがあった。

#### 2) 【看護師の親へのかかわりについての思い】(表3)

大カテゴリーの【看護師の親へのかかわりについての思い】は、看護師が、面会に訪れた親へかかわりの実際やかかわりに関する思い、親にかかわる場面での看護師

自身の不安な思いであり、6個の中カテゴリーがあった。

1《親子接触のための看護介入の在り方》は、親と子がNICUという環境の中で自然と触れ合うことができるようになるための環境調整、医師からの説明により親の不安が軽減するのではないかという期待から場の設定をしたことなどについての語りであり、6個の小カテゴリーがあった。

2《退院に向けた支援計画の在り方》は、退院時期を予測して看護計画を立てていきたいことやその内容について語られていると判断したものであり、2個の小カテゴリーがあった。

3《親にかかわるときの看護方針の評価》は、NICUに子どもが入院している親全般にかかわる際の情報収集、看護目標、看護計画で大切に思っていることについて語っていると判断したものであり、4個の小カテゴリーがあった。

4《親との関係づくりの姿勢の評価》は、意図的に親と打ち解けることができるような話をすることや看護師自身の主観を確認するようにしながら関係づくりに努める態度について語っていると判断したものであり、2個の小カテゴリーがあった。

5《子どもを理解するための親への情報提供の必要性》は、看護師が親へかかわる際に、親が子どもの状況について理解できるように説明、情報提供の方法や情報提供の内容についての考えを語っていると判断したものであり、6個の小カテゴリーがあった。

6《親へかかわることへの不安》は、看護師自身に親の不安を増強させはしないか案じる思いや親を理解しきれていないことからくる迷いについて語っていると判断したものであり、6個の小カテゴリーがあった。

## 考察

以上の結果より、NICU 看護師の親子関係形成に向けての面会に関する思いの意味について分析、考察する。

### 1. NICU 看護師の思いの関連性とその意味

NICU 看護師の親子関係形成に向けての面会に関する思いをカテゴリーにした。そして、中カテゴリー間の看護としての関連性を検討したところ、図1のように看護過程の各段階として表すことができた。大カテゴリーの【看護師の親を観察しての思い】の全ての中カテゴリー1～8は、看護行為を決定するために情報を集めようとし、それらの情報から看護行為とその方法を判断しようとしており、これは 査定 にあたる。大カテゴリーの【看護師の親へのかかわりについての思い】の中カテゴリー1～3は看護の目標や計画についての語りであり、計画 にあたる。そして、中カテゴリー4～6は親とかかわった結果に関するものであり、実践 である。

表1 親子関係形成に向けての面会に関するNICU看護師の思いのカテゴリーとコード数

大カテゴリー	中カテゴリー	小カテゴリー	コード数	計
:看護師の親を観察しての思い	1:親との関係づくりの必要性	1) 親との意図的なかかわりの重要性	6	12
		2) 対面が少ないことから親と看護師の距離感の認知	3	
		3) 関係性の大切さと現実の看護との隔たりの自覚	1	
		4) 子どもの転室前から意図的にかかわることの必要性	1	
		5) 面識があることでの親との関係づくりの利点の認知	1	
	2:親を理解するための情報収集	1) 親のニーズへの関心	11	22
		2) 親子接触を見守る姿勢の重要性の認知	6	
		3) 医師からの説明後の親の理解と受け止め状況の把握の必要性	2	
		4) 親の表情を観ることの重要性	1	
		5) ありのままの親を知るための先入観の排除の必要性	1	
		6) 親との意図的なかかわりの必要性	1	
3:親の気持ちの推測	1) 親の慎重にならざるを得ない気持ちの汲み取りの必要性	5	21	
	2) 親に面会を要請することへの戸惑いの思い	3		
	3) 病院から面会要請の電話をかけることへの戸惑いの思い	2		
	4) 次の面会を確認することによる親の圧迫感の察知	2		
	5) 親の同胞の経験からの予想と現実との相違	2		
	6) 親の引きずる気持ちの察知	2		
	7) 家庭の事情がある親の気持ちの汲み取りの必要性	1		
	8) コット移床に関する医師の考えと親の思い相違の認識	1		
	9) NICUまで面会に来ることができた親の頑張りの気持ちの理解	1		
	10) 母親と父親の気持ちの違いの汲み取りの必要性	1		
	11) 親の気持ちの奥深さへの気づき	1		
4:親の気持ちの理解	1) 実際のかかわりと過去のケースの経験による親の気持ちの予測	6	20	
	2) 親の気持ちを理解するための交換日記や看護記録の重要性	5		
	3) 過去にかかわったケースと重ね合わせて比較した親の見方	4		
	4) 時間の経過とともにできてくる親の気持ちの理解	2		
	5) 親の気持ちの推測とその確認の必要性	1		
	6) 繰り返し確認することでの親の不信感を招く可能性の自覚	1		
	7) 親としての自分の気持ちの活用意思	1		
5:親子関係のアセスメント	1) 親が子どもに触れようとしないことへの理解	7	18	
	2) カンガルーケアの説明後の親の反応への関心	4		
	3) 親子接触の積み重ねが子どもへの恐怖感の軽減になるとの期待	3		
	4) 子どもに触れることを親に促すことへの躊躇	3		
	5) コット移床後の親の行動変化への関心	1		
6:親と医師との仲介役割の評価	1) 医師からの説明と親の受け止め方との隔たりの印象	3	6	
	2) 医師からの説明の効果への関心	3		
7:親の面会の様子の評価	1) 親が面会に来ることの評価	5	11	
	2) 親の面会回数が減少したことへの心配	3		
	3) 面会に来ることの親にとっての意味	2		
	4) 面会回数と親子関係形成との関連への疑問	1		
8:親の面会状況の意味付け	1) 母親の家族員への配慮した面会時間の持ち方への理解	4	8	
	2) 面会に来ない親への思いやり	4		
:看護師の親へのかかわりについての思い	1:親子接触のための看護介入の在り方	1) 親の不安解消のための医師からの説明の必要性	3	11
		2) 親の気持ちを確認しながらの後押しの意味	2	
		3) 親が子どもに触れられるようになるための促し方	2	

	4) 親子の世界をつくれるような環境調整の必要性	2	
	5) 親が子どもを自由に抱けるようにするための機器類の調整への配慮の必要性	1	
	6) 即座の対応ができるための親への気配り	1	
2: 退院に向けた支援計画の在り方	1) 退院時期を予測した計画立案の必要性 2) 子どもの感染に対する注意点の確認	2 1	3
3: 親にかかわるとき の看護方針の評価	1) 親との看護目標の共有化することの重要性 2) その親の必要性に合わせた育児支援の在り方 3) 繰り返し親に確認する行為への疑問 4) 情報収集する役割分担と情報を把握するための努力	4 4 2 2	12
4: 親との関係づくり の姿勢の評価	1) 気が置けない話のもつ価値 2) 親との相互の思いの確認行為の必要性	5 1	6
5: 子どもを理解する ための親への情報 提供の必要性	1) 成長・発達の進展状況の説明の必要性 2) ME 機器のアラームが鳴ったときの状況説明の意味 3) 子どもへの処置についての説明の必要性 4) 子どもの反応の意味の説明の必要性 5) 面会時間以外の子どもの状況伝達の意味 6) 看護師としての体験談を親に伝えることの必要性	4 1 1 1 1 1	9
6: 親へかかわること への不安	1) 親との対面機会が少ないことによる逃げ出したい気分 2) 自分が発する言葉の重圧感 3) 看護記録から得た情報と実際に確認できるまでの気掛かり 4) 自身の確認動作を親に見られることの恐怖感 5) 人見知りする自身の在り方 6) 計り知れない親の気持ちをを知る努力の欠如	4 3 3 1 1 1	13

表2 看護師の親を観察しての思いに関連したカテゴリー一覧と各代表例データ

## 1 《親との関係づくりの必要性》

## 1) 親との意図的なかかわりの重要性

「Aちゃんの親とは挨拶した程度のかかわりしかなくて、殆どしゃべったことがないから、記録から読み取ったり、みんなから話を聴く中でどうやって関わっていくか自分の中で考えていかなくてはいけないと思っている。」

## 2) 対面が少ないことからくる親と看護師の距離感の認知

「(看護師と親との)関係性ができていれば、こういうお母さんだと分かるけど、私の中で(Aちゃんのお母さん像)つかめていない状況にある。」

## 3) 関係性の大切さと現実の看護との隔たりの自覚

「入院期間が短いと、その中で展開していかなくてはいけないけど、(Aちゃんの場合)長い入院だから、長い流れの人間関係が作れる状況の中で、そういうことが大事にできないのは、せっかく頑張ってやっても身にならない(と思う)。」

## 4) 子どもの転室前から意図的にかかわることの必要性

「(子どもが転室したことで親と看護師との関係が)ゼロに戻ってしまったという感触は持ってもらわないようにNICUにいるうちから接点を持てば良かったと思った。いつもそれは課題になっている。」

## 5) 面識があることでの親との関係づくりの利点の認知

「顔見知りになれば、お母さんはそれだけ話し易くなるかな(と思う)。」

## 2 《親を理解するための情報収集》

## 1) 親のニーズへの関心

「育児行動でできていることをフォローするのではなく、どこに介入する必要があるのかということのアセスメントしないとけないと個人的に思っている。」

## 2) 親子接触を見守る姿勢の重要性の認知

「(親の不安が強い中で)今、あえて(育児行動を)すすめていない状況はいいと思う。」

- 3) 医師からの説明後の親の理解と受け止め状況の把握の必要性  
「先生が(話の中で)お母さんに対して面会に来てくださるとかって強調したけど、上のお子さんがいるので、負担になっていないか確認していきたくったんです。」
- 4) 親の表情を観ることの重要性  
「実際、(Aちゃんの親と)関わって顔とか近くで表情とかを見ないとわからない部分があると思う。」
- 5) ありのままの親を知るための先入観の排除の必要性  
「子どもとの関係を持っていないとは言いきれないから、少し持っていた(親の関する)情報をゼロに戻してお母さんなりの関係の持ち方をしていないかという目でみていこうかなと思う。」
- 6) 親との意図的なかかわりの必要性  
「あまり頻りに面会に来れるお家ではないので、お母さんが来た機会を逃さず、どうかかわるかが問題だと思う。」

### 3 《親の気持ちの推測》

- 1) 親の慎重にならざるを得ない気持ちの汲み取りの必要性  
「お姉ちゃんが小さく生まれて、外(コット)に出て感染しちゃったっていう経過があって、Aちゃんには(コットに)出て欲しいけど、外に出るとそれだけ怖いことだってお母さんの中でわかっているから、戸惑っていた部分もあった(と思う)。」
- 2) 親に面会を要請することへの戸惑いの思い  
「家庭の事情もいろいろあるだろうし、そこで「来てください」「来てください」とも言えない。」
- 3) 病院から面会要請の電話をかけることへの戸惑いの思い  
「(病院から)電話をすることが(面会の)催促になると困るし、そのへん(電話をかけるかどうかの)見極めが難しい。」
- 4) 次の面会を確認することによる親の圧迫感の察知  
「(前に受け持ちした児のお母さんは)他の(子の)お母さん達と看護師のかかわりを見ていけば、いつ(面会に)来れますかと全然そういうこと言っていないとかも分かれば、何故うちだけそういうこと聞かれるんだらうと思ひ、うちって変なのかなとか、他のうちってどうなんだらうってすごく思ったんですって。」
- 5) 親の同胞の経験からの予想と現実との相違  
「お姉ちゃんも未熟児だったから、お父さんお母さんの中で(経過の)予想をしていたが、それより速いペースで進んでしまったことに戸惑いを感じているということを感じた。」
- 6) 親の引きずる気持ちの察知  
「Aちゃんの親は(子どもが)低出生体重児であることを)何となく引きずっていると感じる。」
- 7) 家庭の事情がある親の気持ちの汲み取りの必要性  
「(看護師は)理想的な親になって欲しいって思いがあるかもしれないけど、家庭の事情もある(と思う)。」
- 8) コット移床に関する医師の考えと親の思い相違の認識  
「先生はAちゃんをクベースから出したいと思っているけど、お母さんはクベースを出ると感染をしてしまうのではないかと怖がっていて、不安を持っている。」
- 9) NICUまで面会に来ることができた親の頑張りの気持ちの理解  
「(Aちゃんの親はNICUに行く)行動までとれたということは、少し頑張りうという気持ちがある人で、そういう気持ちの段階にあるのだと思った。」
- 10) 母親と父親の気持ちの違いの汲み取りの必要性  
「(お父さんと比べて)お母さんの方が、(気持ちの変化が)早いかなあと思った。それは、母性なのか、腹で感じていたのか(妊娠中に)予期していたのか)。」
- 11) 親の気持ちの奥深さへの気付き  
「Aちゃんのお母さんは、あんまりしゃべらないけどお母さんなりにたぶんいろいろ考えていると思う。」

### 4 《親の気持ちの理解》

- 1) 実際のかかわりと過去のケースの経験による親の気持ちの予測  
「(Aちゃんのお母さんは)人見知りするというか、あまり人付き合いが得意なお母さんじゃないから、うまく思いが伝わらなくて、誤解されている面もあるかもしれないけど、よく話を聴いてみると、全然愛情がないわけではない。」
- 2) 親の気持ちを理解するための交換日記や看護記録の重要性  
「自分との関係を作っていくから、(親の気持ちが出てくる)日記はあまり参加しなくても見るようにしている。」
- 3) 過去にかかわったケースと重ね合わせて比較した親の見方  
「私、その(前に)受け持ち(した)子のときに(お母さんや家族の事)すごくいろいろ考えたから、結構(Aちゃん家と)ダブル(って考える)んですね。あまり、みんな(自分以外の看護師達)みたいに(Aちゃんの親を)問題視してないというか、なんでそんなに(看護問題を)立てる(立案する)の)と思っちゃう。」
- 4) 時間の経過とともにできてくる親の気持ちの理解  
「(親御さんの気持ちは)その場でないとかわからないときもあるし、1週間とか2週間して振り返ってみて、あのときあーだったとか、もっとこんなに心配していたのかとか、私達が心配するよりも、もっと前向きに考えていたのかなあとか、わかるときがある。」

## 5) 親の気持ちの推測とその確認の必要性

「面会に来たときに関わって話をしながら、お母さんの言葉の端々で(または)言葉では直接言わないけど、その言葉の裏にはこういう気持ちがあって言っているのかなって、もし自分がその場で思ったり感じたら、その場で聴くときもある。」

## 6) 繰り返し確認することでの親の不信感を招く可能性の自覚

「面会に来た時に必ず聴かなくてはいけないことなのか、そうでないことなのか、聴く側も判断しないと、不信感とか嫌な感じしか親御さんに与えかねないと思いました。」

## 7) 親としての自分の気持ちの活用の意思

「実際に子どもを育てる中で、親ってこういうふう思うんだとか、子どもに対して自分は、こういうふうな思いを描くんだということがあるので、それを大切にして、お母さん達の思い(近づいていきたい)と思う。」

## 5 《親子関係のアセスメント》

## 1) 親が子どもに触れようとしにくいことへの理解

「(Aちゃんに)触らないで見ていただけでも、お母さん(はAちゃんが)大事だから、いくら手を綺麗に洗っても、自分が触る手で感染をしちゃったらどうしようって(思っていると思う)。」

## 2) カンガルーケアの説明後の親の反応への関心

「看護師がカンガルーケアの説明をした時にお母さんが言った「毎日しなければいけないんですか?」という記録が気になった。」

## 3) 親子接触の積み重ねが子どもへの恐怖感の軽減になるとの期待

「コットに出て段々スキンシップとか取れるようになってきたなかでは、徐々にそのへん(触るのが怖いという思い)は埋めていけるものだと思うんだけど。」

## 4) 子どもに触れることを親に促すことへの躊躇

「(親子の関係性を把握できていないので)積極的にタッチしてもらったり抱っこしてもらうことは、今の段階では抑え気味でいる。」

## 5) コット移床後の親の行動変化への関心

「1600gのAちゃんがコットに出て、お母さんがどういふかわりをするのか関心がある。」

## 6 《親と医師との仲介役割の評価》

## 1) 医師からの説明と親の受け止め方との隔たりの印象

「クベースにいる時に先生も1400~1500gで(コットに)出れるかもしれないという話はNICUで何回もしているという情報はもっていたけど、お母さん達が2000gという(目標)をもっていたという情報がなかった。そのへんの情報があれば、もうちょっと不安の軽減につながったと思う。」

## 2) 医師からの説明の効果への関心

「(医師からの話をしてもらうのが次の)日曜日になっているので、(親が)どういう反応をしてくるのかが楽しみ(でいる)。」

## 7 《親の面会の様子の評価》

## 1) 親が面会に来ることの評価

「自分(親)達が(Aちゃんに)感染させてはいけないという思いが強かったみたいで、なかなかクベース内タッチングとかもできなかったというのは聴いていたけど、(面会に)来てくれることがとても大切なことなので、それを認めてあげる。」

## 2) 親の面会回数が減少したことへの心配

「記録から読む分だと、(面会が少ないと思う理由)は、正直言って自分でも把握できていないけど、家庭(の事情)もある(と思う)。」

## 3) 面会に来ることの親にとっての意味

「(入院している子どもの)毎日顔を見に来ること、今日の「体重はどうでしたか」って聴くことがすごく自分の安心感っていうか、気持ちの整理になるお母さんもいるだろう。」

## 4) 面会回数と親子関係形成との関連への疑問

「面会に回数来ることが親子関係ができていくことかという、一概にそうではないだろうなと思う。」

## 8 《親の面会状況の意味付け》

## 1) 母親の家族員への配慮した面会時間の持ち方への理解

「面会も短時間だったり、毎日じゃなくて間隔があいたりしているみたいだけど、それはAちゃんを可愛くないとか、受け入れられないから会いに来ないとかじゃなくて、(親が)自分の生活の中の一部が面会で、Aちゃんだけに気持ちがいつ(向いて)いるんじゃない(と思う)。」

## 2) 面会に来ない親への思いやり

「記録から読む分だと、親としてAが感染になっちゃえばAにとっては良いことじゃないって思うからこそ、あえて(面会に)来ないのかなあって思ったり(する)。」

表3 看護師の親へのかかわりについての思いに関連したカテゴリー一覧と各代表例データ

### 1《親子接触のための看護介入の在り方》

- 1) 親の不安解消のための医師からの説明の必要性  
「(お父さん, お母さんの不安の) 解消の方法で, ドクターの立場から話をしてもらって, 私達はその反応をみながら(親の) 思いを聴いていく形をとっていきたいなと思い, そういう場を設定した。」
- 2) 親の気持ちを確認しながらの後押しの意味  
「Aちゃんが段々大きくなってくれば「やってみますか?」と確認して, 反応をみながら後押ししていく。」
- 3) 親が子どもに触れられるようになるための促し方  
「(Aちゃんは) 少し小さくてGCUに移って来たから, お母さん達もすごくビックリしていたけど, 感染面に対しては私達も手洗いを十分にしていること, Aちゃん(自身)も大きくなってきたから感染には少し強くなったじゃないけど, お母さん達も触って大丈夫ですよという形で促していく。」
- 4) 親子の世界をつくれるような環境調整の必要性  
「お母さんがオムツ換えたりどんどん(手が)できて, 自分(親から)やりたいと言い出すようになったら, 2人でいる時間を(過ごせるようにしていく)。」
- 5) 親が子どもを自由に抱けるようにするための機器類の調整への配慮の必要性  
「看護師に断らないと抱っこしてはいけいとお母さんが思っていそうだったら, ベビーセンスをオフにしてあげることをする。」
- 6) 即座の対応ができるための親への気配り  
「今の時点でまず, (看護師が) 側でお母さん分らない顔をしたときは, すぐ手が出せるところにいるようにして, できるだけお母さんにいろいろ(育児行動) やってはもらう。」

### 2《退院に向けた支援計画の在り方》

- 1) 退院時期を予測した計画立案の必要性  
「退院の目処を予測して, お母さんが来たときにどう計画的に関わっていくかポイントになる。」
- 2) 子どもの感染に対する注意点の確認  
「親があまり過敏になりすぎるとも良くないけど, (Aちゃんが) 小さいってことからすると(家に) 帰ってから感染とかに注意をすることだけ伝えて(いければいい) と思っている。」

### 3《親にかかわるときの看護方針の評価》

- 1) 親との看護目標の共有化することの重要性  
「一連の育児行動が不慣れな人もいるし, 不安が強い人もいるかもしれないけど, お母さんの目標に対して私達ができることをするのが一番良いと思う。」
- 2) その親の必要性に合わせた育児支援の在り方  
「その子に関して何が不安かということを確認しながらやっていくようにしている。」
- 3) 繰り返し親に確認する行為への疑問  
「このところ(面会に) 来るたびに, ICを受けてどうだったかとか(親に) 聴いてる感じだし, 毎日毎日あんまりそういうことばかり聴いても(聴かれている) お母さん達は, もしかして自分って変なのかなとか, 自分は他の親と違うのかなとか, 思っちゃうじゃないですか。」
- 4) 情報収集する役割分担と情報を把握するための努力  
「(NICU)に入る子達の家庭環境の情報収集の細かいところで, 受け持ちさんに任せることはあるけど, それ以外のことは, 受け持ちだからここまで良く知っているけど受け持ちじゃないから知らないってことはないようにしようとは思っている。」

### 4《親との関係づくりの姿勢の評価》

- 1) 気が置けない話のもつ価値  
「恋愛話とか結婚についてとか, 全然関係ないところから, こういう人なんだと, お母さん達の考え方が見えてくる(と思う)し, 子どものことだけ話していても(親のことは) わからないですね。」
- 2) 親との相互の思いの確認行為の必要性  
「自分(看護師)達の主観を親にかえて親の思いを必ず確認するようにしている。」

### 5《子どもを理解するための親への情報提供の必要性》

- 1) 成長・発達の進展状況の説明の必要性  
「人間は褒められると良い気持ちになるので, 良い気持ちにさせながら現実(の成長発達)をきちんとあやふやにすることなく言えていかないとならないと思う。」
- 2) ME 機器のアラームが鳴ったときの状況説明の意味  
「(モニター)の音が(すごく)怖いと思わせ(てしまうと)タッチングもうまくいかなかったりするから, 何で鳴るのかを説明する。(説明すると)お母さん達もそういうふう(に)子どもを(みれる)ようになってくる(と思う)。」



- 3) 子どもへの処置についての説明の必要性  
「NICUだったら(親が)全部が始めてのことで、不安だと思うから)感染とか、入っているチューブとかを何のためにつけているとか、私はどういうふうに看護しているって伝えて(説明する)」
- 4) 子どもの反応の意味の説明の必要性  
「できるだけ子どもの反応を返してあげて、お母さんが自然に安心できたり、大きな声で泣けるとか思えるといいなと思う。」
- 5) 面会時間以外の子どもの状況伝達の意味  
「(Aちゃんが目を開いているときをお母さんが見たことがないから)起きているときの写真を撮っておいたりして、(Aちゃんに)関心に向けてもらいたいな。」
- 6) 看護師としての体験談を親に伝えることの必要性  
「教科書(に書いてある)ことをお母さん達に伝えても、いまいちピンとこなかったりとかするから、自分(看護師)の体験談の中から、お母さん達が育児していく上で何かつなげられればいいかなということ話したり(する)」

#### 6 《親へかかわることへの不安》

- 1) 親との対面機会が少ないことによる逃げ出したい気分  
「外来兼務なのでカルテやカンファに参加して情報収集してその子の全体を捉えようとするんだけど、どうしても面会のお母さんお父さん(へのかかわりが)いつも不安で、すごい苦手で、引け腰なんですよ。」
- 2) 自分が発する言葉の重圧感  
「特にこういう所(NICU/GCU)だから自分の(親とのかかわりの中の)一言ってすごく重く感じるんですよ。」
- 3) 看護記録から得た情報と実際に確認できるまでの気掛かり  
「(子どもに接触できないのは)感染(させてはいけないという思い)だけかもしれないけど、どうなのかわからない)」
- 4) 自身の確認動作を親に見られることの恐怖感  
「(親に自分の)わからないこと聴かれたとき、曖昧なことは言えないから、調べたことを言うんだけど、調べる動作に関してお母さんの不信感につながってしまわないか(心配)」
- 5) 人見知りする自身の在り方  
「(顔をあわせる)回数を重ねていけばいろんな話できるけど、私も結構人見知りする。」
- 6) 計り知れない親の気持ちを知る努力の欠如  
「母子分離とかって普通考えられないことだから、お母さんの計り知れないその思いに答える自分の勇気がないんですよ。」

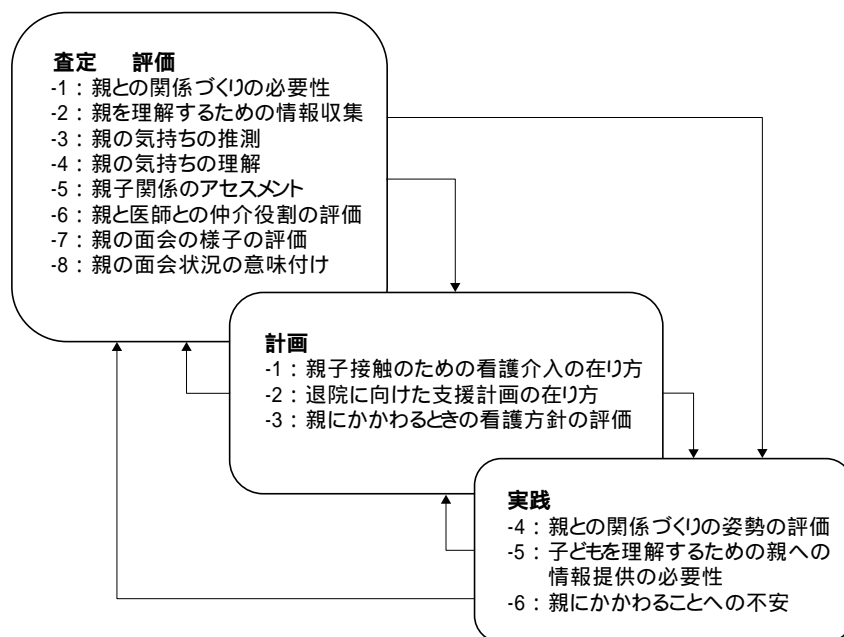


図1 NICU 看護師の親子関係形成に向けての面会に関する思いの関連図

また、大カテゴリーの中カテゴリー7, 8の2項は評価に関する思いであり、これらは査定の中に含めた。このように看護師の思いは、看護の機能を果たすために順序だてられた系統的な方法である看護過程<sup>11)</sup>の全ての段階について語られている。しかもカテゴリー数が最も多いのは査定評価であり、対象理解の重要性、対象理解の困難性が重視されている。これらの語りの中心となる事柄として、親の気持ちを知りたいという思いと、自分自身の看護に対する迷いや不安、そして、それを再確認することの重要性を表す言葉が多くみられている。

これらの思いは、親のニーズの把握への重要性の認識ともいえる。患者の援助へのニード (need-for-help) を理解することは、看護師の役割であり、患者ケアにおける看護師の責務である<sup>9)</sup>といわれている。従って、「親の気持ちを知りたい」という思いは、要求や欲求を満たしたり、困った事態を解決することにつながり、それ自体が個別的な看護実践となる。それゆえ、この思いは、対象の理解につながる思いであり、親子関係形成に向けての個別的な看護としていく重要な意味があると考ええる。

また、親子関係形成に向けての援助は、主に心理的援助であり、親の心の中や感情や思いという観えにくいことへの援助である。看護師が看護上の迷いや不安という思いをもつことは、看護が人間を相手にすることの難しさゆえに生じるものであり、その意味を考え、看護実践の全ての過程において、看護師の思いを意識して活かせるようにすることが重要である。

## 2. 親の思いを知る機会としての面会時間の意識的活用

看護師の語りのうち、親子関係形成に関する思いのコード206個<sup>1)</sup>中の172個(約8割)は、親の面会に関する語りであり、親子関係形成には面会時間が重要な場であることが裏付けられた結果といえる。看護師は、決して面会時の親とのかかわりが重要であるといった言葉で表現しているのではなく、親と実際にかかわり、親の思いを言葉、表情や行動から察知したり、親の子どもへのかかわり状況を観察したりするためには、親と接することが必要だと語っていた。これは、面会そのものの重要性を再認識しているといった語りでもある。そして、このことは、こうした語りをもつ場を得て、新たに再認識したということであり、自らの思いを意識して活用していたとはいえない状況ともいえる。

思考とは、福居<sup>12)</sup>によると「(前略)...何らかの仕方で提出された問題に関して如何に行動するのが適当か、という問いに答えようとする努力であり、行動に向かって身構えをとりつつ行動を停止している状態である。...(後略)」とある。もし、語りの場をもったことにより、語りつつ自らの語りの意味を意識したならば思考したこと

になるだろう。

看護が実践の科学であるなら、或いは考えて根拠をもって行動することが重要とするなら、看護師は常に目的意識をもって行動しなければならない。NICUの場合は、生命の安全の確保と同時に、親子関係形成のための看護の在り方と評価を常に意識しながら看護実践を行うことが求められる。即ち、決して行動と思考が別々にあってはならないということであり、人間にとっての思考の意味を知ったからには、その分離をできるだけ避けていくための努力をしなければならないということになる。

また、面会とは、粟屋<sup>13)</sup>によると「一般に、人々が病院を訪れ、患者を見舞うこと。面会者は家族、友人、職場の同僚などさまざまである...(中略)..家族の面会は患者自身の家族の一員としての役割意識や闘病意欲の向上につながることもある...(後略)」とある。しかし、NICUへの入院が一般小児科を含めた他の入院と決定的に違うのは、子どもが家族の全員から家族の一員として認められ、家族関係が成立してからの入院ではないということである<sup>14)</sup>。即ち、看護師は、親子分離した状況の中で家族が主体的に子どもを育てていけるように意識してかわらなければならない。親と子の面会の場合は、看護師にとっても重要な看護の場である。

また、親子関係をアセスメントする場合、面会の頻度や子どもへのかかわり方といった親の行動を知ることが重要である<sup>15)</sup>。看護師の語りの中で、親の面会の様子を気に掛け、親子関係のアセスメントをすることや、親の生活状況に合わせた面会のもち方などといった思いがでてきている。このことは、看護師の思い込みのままで親にかかわることを避けたいという認識の表れととれる。ここで重要なことは、NICUにいる子どもへ面会に来た親を観てこそ、親と子の関係性をアセスメントする情報が得られ、そして、親との関係づくりができるということである。親の面会の頻度や時間に関係なく、看護師は面会の時を貴重な時間と捉え、その時その場で親への思いを意識して、かつ丁寧にかかわりをもつことが、親子関係形成に向けた援助といえる。また、親子関係の形成ができてくるといことは、看護師との関係づくりもできてくると認識し、面会時間をより意識して活用することができると考える。

## . おわりに

NICU看護師の親子関係形成に向けての面会に関する思いの意味は、個別的な看護実践をしていくための「親の気持ちを知りたい」ということと、自分自身の看護に対する「迷いや不安」ということであった。これらの思いは、無意識的に「感じている思い」から意識的に「考

えている」思いというような幅があるため、実践を通して思いを意識化する訓練の必要があり、日々の積み重ねが大切である。看護師自身が日常の実践の中で様々な「思い」を重要なものとして認識し、意識的に分析することができたならば、看護実践とその判断の評価を確実に行えることが可能となり、看護の質の向上につながると考える。

## 謝辞

本研究にご協力頂きました NICU 看護師の皆様様に心より感謝申し上げます。

なお、本研究は平成15年度山梨県立看護大学大学院修士論文の一部である。

## 文献

- 1) 安藤晴美(2003) 新生児医療施設における親子関係形成に向けての看護師の親への思いの実態. 山梨県立看護大学大学院修士論文.
- 2) 中村肇(2000) 新生児医療の光と影. こころの科学, 94(11): 28 - 32.
- 3) 多田裕(2002) ハイリスク新生児とは. 小児看護, 25(9): 1005 - 1062.
- 4) 横山直樹, 中村肇(2002) ハイリスク新生児の発達予後. 小児看護, 25(9): 1063 - 1069.
- 5) Klaus, M.H., Kennell, J.H., (1982) Parent-Infant Bonding. 竹内徹, 柏木哲夫, 横尾京子訳(1990) 親と子のきずな. 医学書院.
- 6) 藤江のどか(2002) ハイリスク新生児の育児支援と虐待予防. 小児看護, 25(9): 1087 - 1092.
- 7) Sammons, W.A.H., Lewis, J.M., (1985) Premature Babies. A Different Beginning. 小林登, 竹内徹監訳(1990) 未熟児 その異なった出発. 医学書院.
- 8) 橋本洋子(1996) 新生児集中治療室(NICU)における親と子へのこころのケア. こころの科学, 66: 27 - 31.
- 9) 橋本洋子(1996) 未熟児の親への援助. 母子保健情報, 33: 24-28.
- 10) Wiedenbach, E(1964) Clinical Nursing: A Helping Art. 外口玉子, 池田明子訳(1992) 臨床看護の本質 患者援助の技術. 現代社.
- 11) 金子道子, 井上幸子(1998) 看護学大系 第 巻 看護の方法〔1〕〔第2版〕(井上幸子, 平山朝子, 金子道子編集), 日本看護協会出版会.
- 12) 福居純(2003) 現代哲学事典(山崎正一, 市川浩編). 講談社現代新書, 275 - 277.
- 13) 粟屋典子(2003) 看護学事典(見藤隆子, 小玉香津子, 菱沼典子総編集). 日本看護協会出版会, 658.
- 14) 二俣ゆみ子(1997) NICU 看護に求められるもの. 小児看護, 20(9): 1108 - 1112.
- 15) 木下千鶴, 砥石和子(2002) 看護者とのかわりと面会時のケア. 小児看護, 25(9): 1238 - 1242.